

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011 ～ 2011

課題番号：23653181

研究課題名（和文） 親子を対象にした美術表現を促すワークショップ・プログラムの開発とその効果の検討

研究課題名（英文） Designing an art workshop program to facilitate artistic expression by parent-child pairs

研究代表者

岡田 猛 (OKADA TAKESHI)

東京大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：70281061

研究成果の概要（和文）：

本研究では、美術館において、親子対象の「表現の促進」に焦点を当てた教育プログラムのデザイン・実施を行い、その効果を検討した。プログラムは全3回のワークショップによって構成され、17組の親子が参加した。質問紙調査の結果からは、多くの親子が、ワークショップを通じてアートに対する認識を変え、表現への興味を高めていたことが明らかになった。また家庭でもワークショップに関する会話が交わされ、関連する活動が展開していたことが確認された。

研究成果の概要（英文）：

In this study, we designed an art workshop program to facilitate artistic expression by parent-child pairs, and evaluated the educational effect of workshops held at an art museum. The program consisted of three workshops in which seventeen parent-child pairs participated. The results of the questionnaire survey that we conducted during the workshop program showed that many parent-child pairs changed their views of art, and their interest in artistic expression increased. They also discussed the art workshops and participated in art related activities at home.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	3,100,000	930,000	4,030,000
年度			
年度			
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：学習過程・ミュージアム学習

1. 研究開始当初の背景

これまで教育心理学研究は、「学校での学び」に関する有用な知見を蓄積してきた一方で、学校外の環境における「インフォーマルな学び」に対してはあまり焦点を当ててこなかった。しかしながら、子どもが親との協働の中で興味を形成し、様々な知識を獲得し、学びを深めていくというインフォーマルな学習のプロセスは、学校での学習の準備段階としても極めて重要な役割を果たすことが指摘されている (Crowley & Jacobs, 2002)。近年、インフォーマルな学習環境の中でも、とりわけ「ミュージアム」が大きな注目を集めている。ミュージアムは、「ホンモノ」の展示物に結び付けられたリアリティの高い知識を与えられる場であり、ユニークな学びが生起する大きなポテンシャルを有しているためである (Paris, 2002)。また、他者作品の模写や鑑賞が個人の表現を深めていく上での有効なソースとなるという知見を鑑みれば (石橋・岡田, 2010)、ミュージアムの中でも美術館は、市民が創造や表現を深めていくための極めて大きなポテンシャルを有した機関だと言える。

しかし、これまでのミュージアムにおける心理学的研究で扱われてきたのは、主に博物館や科学館における「知識の獲得」という意味での学習であり、美術館を舞台にした「表現や創造の支援」に関わる教育プログラムや、その効果を実証的に検討した研究は、世界的にも手つかずのままである。

加えて、「ミュージアムその場での体験や学習」に関する知見が得られてきている一方で、それがいかに日常生活に持ち込まれ、家庭での活動に影響するのかという点はほとんど検討されていない。ミュージアムが展開する展示や教育普及活動は、長期的な学びの支援を視野に入れていることも多いため (Falk & Dierking, 1992)、そのような観点からミュージアムの実践の効果を捉える方法論を確立することは緊要な課題と言える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、①美術館における、親子対象の「表現の促進」に焦点を当てた教育プログラムの開発・実施を行い、②実践を通して参加者の表現や鑑賞がどのように変化したか、そして、美術館での体験が日常生活や家庭にどのように影響したかという観点から、実践の効果を精緻に評価することである。

なお、プログラムは、美術館の教育普及担当学芸員や常設展示担当学芸員、及び、現代美術家らとの協働によってデザインする。また効果の検証に際しては、ワークショップ活動中のプロセスの記録の他、参加前・参加後に回答してもらおうアートや表現への態度を

調べるための質問紙、鑑賞の仕方への影響を検討するためのテスト、家庭や日常生活への長期的な影響を捉えるためのアンケートなどを組み合わせ、多様な角度から分析を行っていく。

3. 研究の方法

(1) 実践のデザイン

まず、研究協力者である美術館の学芸員や現代美術家らとミーティングを重ね、ワークショップ・プログラムのデザインを構築していった。その際は、研究の目的を踏まえながらも、協力者である学芸員や現代美術家らが蓄積している実践知も積極的に取り込み、より有効かつ新しい実践を作り上げることを図った。

その結果、プログラムは全3回とし、第1回目は教育普及担当学芸員がファシリテーターとなって、作品鑑賞から自らの表現へとつなげていくようなワークショップを行うこととした。続く第2, 3回目では、現代美術家がファシリテーターとなって実施する、アートの多様なレパートリーを示しながら、音や形のイメージを出発点とした表現を体験させる実践をデザインした。

各回とも、参加者親子を3つのグループに分けた活動を取り入れ、グループごとに担当スタッフがついた。

(2) 実践の期間と参加者

実践は、東京都現代美術館の講堂において、2011年11月20日、12月4日、18日の、隔週日曜日に行われた。時間は各回13時~16時の3時間である。

実践参加者は、小学校中学年~高学年の児童を含む、計17組の親子である (ただし、各回ともに数名ずつ欠席者がいた)。これら参加者の募集は、美術館を通じて行い、応募の際には、①3回のワークショップ全てに継続的に参加することが可能なこと、②調査研究への協力が可能なこと、を条件とした。なお、参加費は無料であった。

事前のアンケートの回答から、多くの参加者は、親子ともに、もともとアートが好きであると回答している。また、それまでに1度でもアートに関わるワークショップに参加したことのある子どもは9名 (53%)、親は3名 (18%) であった。

(3) 評価の方法

ワークショップの効果を検討するために、様々なデータを収集した。

第一は、ワークショップ各回終了後に、親・子それぞれに実施したアンケートである。各回のワークショップの中で、参加者がどう

感じていたかを把握することを目的としたものである。

第二は、ワークショップ各回終了後の、家庭での様子を報告してもらうアンケートである。これは親に対して回答を求め、ワークショップが家庭でのどのような会話や活動をもたらしたかを捉えることを目的としている。

第三は、プログラム全体の事前・事後に実施したアンケートである。親・子それぞれに対して実施し、美術や表現に対するイメージや態度等を含め、事前・事後で比較できるようにした。なお、事前アンケートは第1回ワークショップ前に郵送で依頼し、事後アンケートは第3回ワークショップ終了後に配布し、回答後郵送してもらう形式をとった。

第四は、第1回のワークショップ冒頭、及び第3回の最後に実施した、鑑賞に関わるテストである。親子がペアになって、2枚の絵を自由に鑑賞するセッションを設け、その会話を記録した。その比較から、プログラムの鑑賞への効果の検討を試みた。

その他、実践のプロセスに関わるデータとして、各回の実践の様子を3~4台のビデオカメラで記録し、また各グループの会話等はICレコーダーで記録した。

4. 研究成果

(1) 各回終了後のアンケート回答の分析

まず、参加した親子それぞれに対し、各回終了後に実施したアンケートへの回答を検討した。まず、ワークショップは楽しめたか否かを5件法(1:全く楽しめなかった - 5:とても楽しめた)で尋ねたところ、保護者の回答の平均値は、1回目から順に4.88, 4.92, 4.91, 子どもの回答は、同4.63, 4.67, 4.73であった。ワークショップの中では、親子ともに極めて楽しい時間を過ごしていたと言えよう。

また親に対して、「アートの鑑賞や表現に関して、新しく考えたことや、発見したことはあったか」を尋ねたところ、「はい」と答えた回答者の比率は、1回目から順に、100%, 92%, 91%であった。このような結果から、いずれの回も、親にとっては何らかの発見や気づきのあるワークショップであったことが推察された。具体的な回答を見ると、第1回目では、アートに対する認識が変わった、あるいは、鑑賞に対する新しい視点を知ることができたというものが多くを占めていたのに対し、2, 3回目の回答は、アートの表現に対する認識の変化や、表現の多様性・人それぞれの発想やイメージの違いを実感できた、などといった回答が目立った。

さらに、各回のワークショップの経験は、

その後の活動や日常生活に影響を与えると思うかを尋ねたところ、「とても」もしくは「少し思う」という回答した率は、いずれの回も100%であった。

これらのことから、本プログラムは、第1回目で「鑑賞」の側面に働きかけ、2, 3回目で「表現」の側面に介入するという、当初の目的に沿ったものとして機能していたことが示唆された。

(2) 家庭への影響

続いて、ワークショップが日常での会話や活動にどのような影響をもたらすかを捉えるために実施した、ワークショップ各回終了後の、家庭での様子を報告してもらうアンケートの結果を検討した。

その結果、ほとんどの親子が、帰りの道中、ワークショップの感想を伝え合っていたことが明らかになった。そのほとんどは、ワークショップのどのような部分が楽しかったか、あるいは、自分がどのような作品を制作したのかについて説明をし合うようなものであったようである。また、家に帰った後も、参加できなかった家族(主に父親もしくは母親)に対して、持ち帰った作品を見せながら、ワークショップの報告を行っていた。

さらにそれ以降も、持ち帰った作品にさらに手を入れたり、ワークショップの影響を受け、影や形、音に注目した表現を、家庭や友達との間で行ったりする子どももいたようである。

また、家庭で生成された会話は、体験したワークショップに関わるもののみならず、次のワークショップを推測するような会話を交わした親子も多かった。

(3) プログラム全体終了後のアンケート

プログラム参加前、終了後にそれぞれ実施したアンケート回答の比較から、プログラムに参加したことによる変化についての検討を行った。その結果からは、①多くの親子がアートや表現への興味を高めていたこと、②子どもの表現への働きかけ方について、ヒントを得ていた親が多くいたこと、③多くの親子が、日常をより注意深く眺め、そこからイメージを膨らませたりするようになっていたこと、などが示唆されている。

現在は大まかな傾向を検討するに留まっているが、今後より細かい記述内容の変化に関して検討を行っていく予定である。

(4) 鑑賞に関するテスト

親子の鑑賞活動に対する影響を調べるために、プログラム全体の冒頭、及び最後に自由に作品を鑑賞してもらうセッションを設け、その会話内容の比較を行った。

まず全体の会話量を検討したところ、2回

のテストの間に有意な差は見られなかった。したがって、プログラムに参加したことによって、アート作品を前にした鑑賞の量が増えたということはなかったと言える。しかしながら、生成された会話が、プログラム参加前後で質的に変化している可能性は十分考えられる。そのためこのデータに関しては、今後、具体的な発話内容の違いについて精査していくことを予定している。

()
研究者番号：
(3) 連携研究者
()
研究者番号：

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 猛 (OKADA TAKESHI)

東京大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：70281061

(2) 研究分担者